

第2回岩手県海岸保全基本計画検討協議会の議事概要について

日 時：令和7年7月8日（火）13:00～15:00

場 所：マリオス 18階 181会議室（Web併用）

出席構成員：小笠原敏記構成員、有働恵子構成員、森下秀昭構成員、平山克也構成員

代理出席：姫野一樹主任研究官

設置要綱第6条に基づく出席者：佐々木幹夫観測予報管理官

1 検討項目

- ① 海岸保全基本計画の概要、気候変動を踏まえた計画外力の検討方針
 - ・検討に用いる海面上昇量については「日本の気候変動2025」の内容を反映させるものとして方針を確認・共有した。
- ② 津波浸水被害に対する計画外力の算定手法の検討
 - ・前回検討会を踏まえて、見直しを実施した代表地域海岸の選定方針について、整理した結果を確認・共有した。
- ③ 高潮浸水被害に対する計画外力の算定手法の検討
 - ・波浪・高潮シミュレーションの再現計算結果と、シミュレーションを実施する台風及び低気圧の選定結果を確認・共有した。

2 協議会での主要な意見

- ① ・第1回検討協議会の資料では、代表地域海岸の選定方針に湾の形状も含まれていたように思う。今回の選定方針では湾の形状は含まれていないのか。
- ② ・今回、気候変動の影響を考慮した津波水位を算出するうえでは、H23年度に算出した際と各種条件が異なる部分があると思うので、各々の結果の関係性や条件の違いをしっかりと整理した上で、今回どのように設計津波の水位を設定するのか検討した方がよい。
- ③ ・波源モデルは設計津波群を設定して、そのなかで最大のもの選定しているので、波源モデルが切り替わる境界など、水位が近い地域海岸では他の波源が逆転する可能性があるため検証したほうがよい。
- ④ ・波高の観測結果が得られた台風のケース数が少ない中でのチューニングのため、風場を再現するパラメータの妥当性が懸念される。モデル自体は浅海域を再現できるSWANモデルを使用しているので、沿岸波浪計のデータも活用した方がよい。なお、このとき波浪推算モデルの空間解像度にも留意すること。また、台風のケース数を確保するために、観測データが得られている台風を優先的に選定したほうがよい。
- ⑤ ・風速の計算結果がアメダスの観測データと合致しないケースがあったが、他県も同じ手法を使用しているのか。他県との手法の整合性も確認するべきである。
- ⑥ ・台風による高潮偏差や波浪の推定に、多くのパラメータからなる重回帰式を用いるためには、海上風なども含めて多くの観測データを要する。なお実際には、こ

れらは精度検証されたシミュレーションにより求めることが比較的行われている。

- ⑦ ・ 過去実験と将来実験との結果の比をとり、現行の設計値にこの比を乗じて将来の設計値を決定している事例もあるため、参考にとよい。
- ⑧ ・ 低気圧の再現計算において観測データが少ないことから、沿岸波浪計で観測された波高も参考にとよい。
- ⑨ ・ トラックデータの抽出について、台風と低気圧が重複しているケースは除外する必要がある。
- ⑩ ・ 「爆弾低気圧」という用語は気象庁の正式な用語ではないため、「急速に発達する低気圧」と言い換えることを推奨する。

3 検討結果

- ① ・ 代表地域海岸の選定方針について、再度検討を行う。
- ② ・ 条件の違いを確認し、結果との関係性を整理したうえで、設計津波水位の検討方針を決定する。
- ③ ・ 海面上昇量を加算した津波シミュレーションを実施する際に、H23 年度に設計津波水位を算出した波源モデルによる設計津波水位を、他の波源モデルによる設計津波水位が上回らないことを確認する。
- ④ ・ 台風及び低気圧の再現計算において、沿岸波浪計で観測された波高が活用可能かを検討する。また、波浪推算モデルの空間解像度及び再現計算を行う台風についても確認を行う。
- ⑤ ・ 台風及び低気圧の検討手法については、隣接県での手法を確認したうえで進めていく。
- ⑥ ・ シミュレーション結果等を踏まえて、重回帰式に用いるパラメータを決定していく。
- ⑦ ・ 事例を確認し、将来の設計値の決定方法として利用可能かを検討する。
- ⑧ ・ 低気圧の再現計算において、沿岸波浪計で観測された波高が活用可能かを検討する。
- ⑨ ・ 台風及び低気圧のトラックデータの抽出にあたり、台風と低気圧が重複しているケースがあるかを確認する。
- ⑩ ・ 「急速に発達する低気圧（通称：爆弾低気圧）」に修正する。